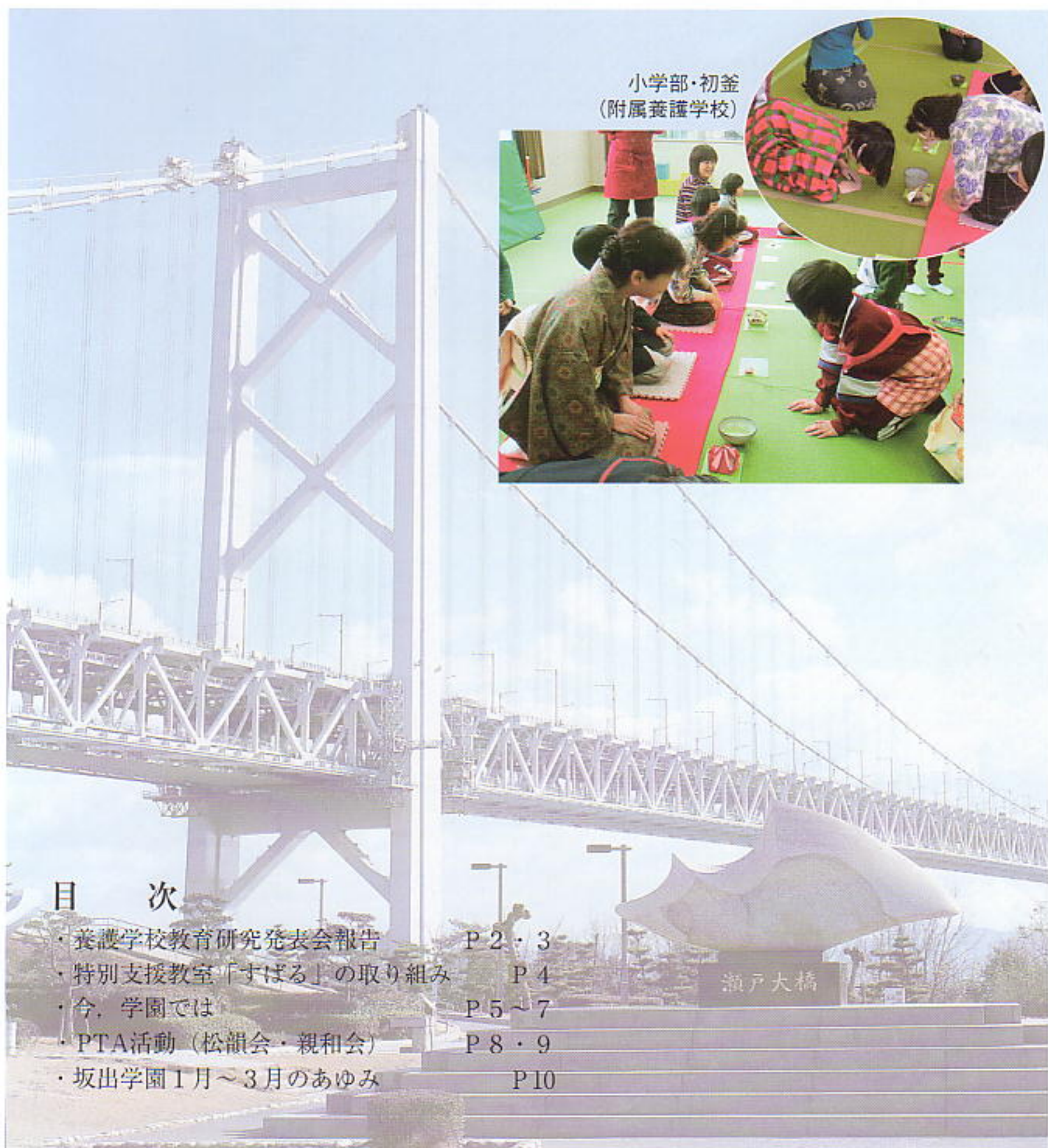


香川大学教育学部

附属坂出学園だより

第26号

2007.3



小学部・初釜
(附属養護学校)

目次

- ・養護学校教育研究発表会報告 P 2・3
- ・特別支援教室「すばる」の取り組み P 4
- ・今、学園では P 5～7
- ・PTA活動（松韻会・親和会） P 8・9
- ・坂出学園1月～3月のあゆみ P 10

暮らしを支える共働支援をめざして -WANTSの視点 NEEDSの視点-

平成19年（2007年）2月9日（金）、附属養護学校の第14回教育研究発表会が行われました。北海道から鹿児島まで県内外の小・中・養護学校・大学及び関係諸機関から300名を超える参会者をお迎えして、全体提案や各学部分科会、ワークショップ・ポスターによる事例発表を行い、障害のある児童生徒の暮らしを支えるために本校が取り組んできたことを発表することができました。今回は耐震工事の影響で研究授業を公開することがかなわず、代わりに「あなたを選ぶ！参加型の研究大会」をめざして工夫を凝らしました。

一般参加	県内保育所幼稚園	4	123	312
	県内小学校	49		
	県内中学校	18		
	県内障害児諸学校	19		
	県内施設作業所	7		
	県内福祉関係	9		
	県内保護者	9	90	
	県内学生	8		
	県外小学校	21		
	県外中学校	3		
	県外盲・聾・養護	42		
	県外その他	24		
来賓	県内来賓	88	99	
	県外附属関係	6		
	県外その他来賓	5		

全体会・学部分科会

全体提案で研究の概要を説明したあと、3会場に分かれて学部分科会を行いました。

小学部分科会では「子どものWANTSをはぐくむために」の学部テーマに沿って取り組みを紹介しました。会場の参加者にお菓子を選択していただくデモンストレーションを通して「選択」することの重要性を訴えました。指導助言者として車谷先生（坂出市立西庄小学校校長）、恵羅先生、坂井先生（香川大学）に参加していただきました。

中学部分科会では「WANTSに応える集団学習」の学部テーマに関する取り組みを発表しました。WANTSを表明しやすくするための集団づくりの工夫や支援方法を生徒の変化を紹介するビデオを紹介しながら説明しました。そして、高尾先生（香川県立盲学校教頭）、繪内先生（香川大学）に指導助言をいただきました。

高等部分科会では「個別の共働支援に生かす教育課程の再編」の学部テーマのもと、3年間取り組んできた「職業国語」、「職業数学」、学校設定教科「ステップアップ（少人数課題選択学習）」の様子を紹介しました。篠塚先生（ふじみ園相談支援専門員）、小方先生（香川大学）に指導助言をいただきました。



小学部ポスター

ポスター発表

小・中・高等部そして保健室からの発信を含めて、合計16本のポスター発表を行いました。小学部ポスター2では保護者の方と、ポスター3ではコーディネーターの方と、そしてポスター4では、坂出市立瀬居小学校との共同提案という形をとりました。各ポスターとも実物の教材や子どもの表現物、授業の様子を紹介したビデオなどをあわせて提示しました。



高等部ポスター

ワークショップ



サポートブックを作りました！

参加型研究会の目玉としてワークショップを11か所開設しました。

「サポートブックを作りました」では、サポートブックの生みの親である丸岡さんのご指導の下、参加者が帰ってすぐに使えるサポートブックを作りました。

「アニメーション版心の理論」からSST、「SSTの実際」は、特別支援教育からの注目度が高く、多くの参観者でにぎわいました。

高等部フリートーク「こんなとき、どうしますか？」には、本校卒業生を実際に雇用していただいている事業所の方やハローワーク、障害者職業センター、就業支援センターなど、日ごろから卒業生の就労を支えて



コミュニケーショングッズ

くださっている方々に助言者として参加いただき、職場で起こりがちな問題場面のロールプレイを題材にして意見交換を行いました。

〈11のワークショップ〉

- 保健室からの発信
- パワーポイントを使った視覚的な教材紹介
- パワーポイントを使った視覚的な教材作り
- 資料集付録CDの活用術！
- サポートブックを作りました！
- 教室紹介(小学部1組)
- 使えるコミュニケーショングッズのアイデア
- 「アニメーション版心の理論」からSSTへ
- SSTの実際 繪内先生講演会
- 楽しく筋力トレーニング！
- 「こんなとき、どうしますか？就業版」



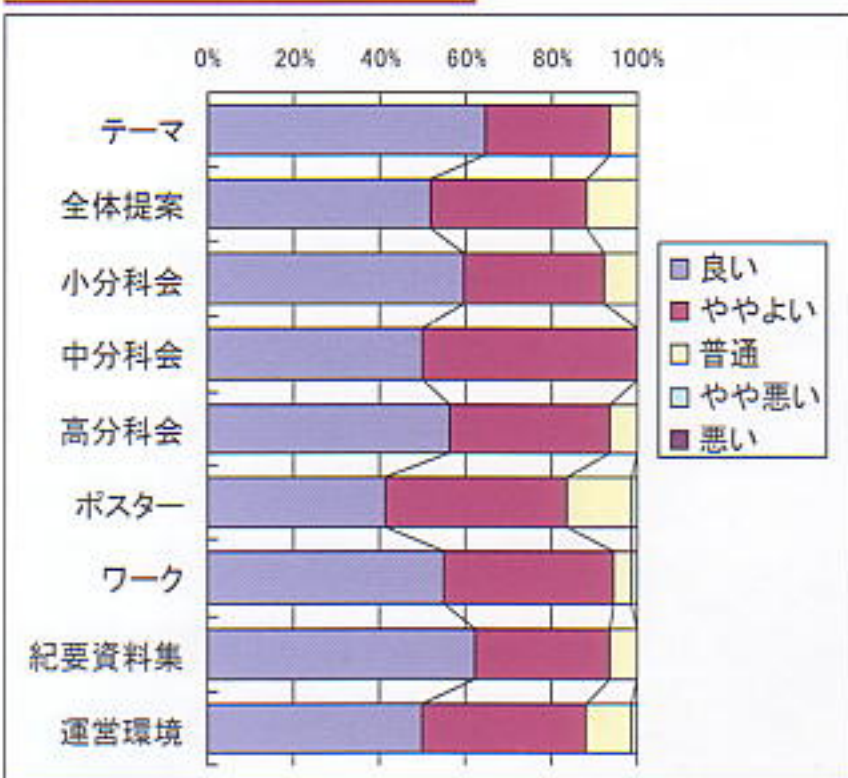
楽しく筋力トレーニング

講演会

「知的障害のある児童生徒のWANTSを高める教育への期待」の演題で横浜国立大学助教授 渡部匡隆先生に講演をいただきました。サブテーマに挙げている「WANTS」の理念を3年間にわたってご指導いただいた渡部先生から、本研究のバックボーンとなる「WANTS」の重要性について話していただくことができました。



アンケートより



WANTSの考え方は通常学級や生徒指導にも通じる。生徒は一人一人必ずやりたい自分があるはず。それを私たちがどう見つけ手立てをするかで子どもの伸びが違ってくる。WANTSとNEEDSの違いもそこからくるものだと思う。
(中学校の先生)

企業などの方の話が聞いて大変よかった。作業所でもさまざまな支援をしながら、新しい作業や突然の残業にも取り組んでもらっている。作業所は企業への就職に向けたステップとしてはとても意味のある場所。働くことは大変なことですが、でも働いて得る喜びを感じてもらいたいと思います。WANTSを引き出しこれからも支援していこうと思います。
(作業所 指導員の方)

特別支援教育研究大会が開催される

平成19年2月10日（土）に、香川大学講堂を中心に教育学部各教室を使用し、全国より800名の教師や保護者、関係機関職員の参加をえて、標記の研究大会が開催されました。



来賓としては、文部科学省からは、特別支援教育課企画官の佐藤先生、香川県教育委員会より、教育次長の長谷川先生をはじめとして、義務教育課・高校教育課・障害児教育課・子育て支援課の各課長様のご出席をいただきました。

ご講演をいただいた講師の先生方は、文部科学省特殊教育調査官の石塚先生、東京国立近代美術館館長の辻村先生、愛媛大学監事の近藤先生です。

午後からは、幼、小、中、高・養護の各部会に分かれて分科会を開き、活発な討議がなされ

ました。その後、「今後の特別支援教育の推進」に関するシンポジウムが開かれ、討議が深まりました。



本研究大会は、附属坂出学園が教育学部と合同で、4年間にわたり実施してきた事業である特別支援教室「すばる」の実践研究を発表し、今後の特別支援教育の在り方を探る大会でありました。

全国から多数の参加を得て開催されたことは、意義深いことであり、特別支援教育に関する注目度の高さをうかがうことができました。

今後は、この成果を基に一層実践を深め、香川県教育委員会をはじめとした関係機関とも連携し、より身近で具体的な支援の在り方を探っていくことの必要性を強く感じています。





みんなでお茶会

2月22日、幼稚園にお茶の先生をお迎えして、お茶会が開かれました。もうすぐお別れの青組のお兄さん、お姉さん、そして、黄組さんにも、自分たちが点てたお茶を飲んでもらおうと、朝から張り切っていた赤組の子どもたち。背筋をピンと伸ばして正座し、少し緊張した様子ながらも、楽しみな気持ちを膨ら

ませながら、お茶の先生のお話をしっかりと聞いていました。

いろいろな作法を実際に見せていただきながら、まずは自分たちがお菓子とお茶をいただき、「おいしい!」とみんな目を輝かせていました。さあ、今度はお茶を点てる番です。「うーん、ちょっと難しいなあ」「ねえねえ、上手にできた、見て!」青組さんに喜んでもらおうと、どの人も真剣な表情です。点てたお茶を、大事そうにそーっとそーっと青組さんに“お運び”して、赤組の部屋まで帰って行くときの子どもたちはというと…いつものようにはしゃいだ様子で元気いっぱい帰って行くのかと思いきや、そうしなさいと言われたわけでもないのに、両手をちょこんと前で組んで、しずしずと上品に廊下を歩いているではありませんか!なんとも微笑ましい姿でした。

黄組さんのお茶を点てる時には、英語のカーステイン先生も参加してくださいました。最後にお茶の先生方に歌をプレゼントして、楽しいお茶会を終えた子どもたち。この日のお弁当後の歯磨きのとき「せんせーい、ほく今、お茶点てよんで」とやって来た男の子の手元を見ると、コップの中の水を、歯ブラシでシャカシャカとかき混ぜていました。



お別れ遠足に行ったよ

2月26日、青組さんとの楽しい思い出づくりに、角山へお別れ遠足に出かけました。とても良い天気で、子どもたちも早く出発したいとワクワクしているのが伝わってきました。

幼稚園から登山口まで、青組さんと手をつないだ黄組さん。これまで何度もそうしていろいろなところへお出かけしてきました。その手の温もりから、青組さんのあたたかい優しさを感じたことでしょう。

登山口からは、一人一人が自分のペースで登っていきました。

角山登山のベテラン、青組さん。一番に登り切るんだと、どんどん速いペースで登っていく人。足にけがをしている担任の九郎座先生と、どうしても一緒に頂上まで行きたいと、先生を気遣いながら、ゆっくり登っていく人。自分の体調が万全ではないにもかかわらず、小さい人の少し前を、「♪おいでおいで…」と楽しい手遊び歌を歌いながら登っていく人…。すてきな姿がたくさん見られました。

4月からは自分たちが幼稚園で一番お兄さん、お姉さんとなる赤組さん。「大丈夫?」「頑張れー!」などと声をかけ合いながら、友だちと一緒に手をつないで登ったり、青組さんに負けまいと、すごいスピードで登っていったり、一人一人の姿に頼もしさを感じました。

2度目の登山となる黄組さん。自分の足でしっかり登っていく姿は、みんなと一緒に歩く遠足は楽しいな、そんな気持ちが伝わってくる生き生きとした姿でした。

頂上で、写真を撮った後、おやつを食べたり、遊んだり…。青組さんとの最後の遠足、楽しい時間はあっという間で、まだまだ時間がほしいくらいでした。

園に帰ってから、みんなで園庭で食べたお弁当も、とてもおいしかったです。一緒に、お別れ遠足に参加して下さった保護者の方々、本当にありがとうございました。



「思考力」をはぐくむ学びの創造

— 脳神経科学研究との連携 —

附属坂出小学校では、1月22日（月）に坂出市・綾歌郡の校長先生方との「坂出・綾歌校長会」、2月5日（月）に香川大学の先生方との「大学との共同研究会」と、外部の先生方をお招きしての研究会を開催しました。

そして、現在はこれらの会でいただいたご指導をもとに、第91回教育研究発表会（5/24～5/25）に向け、1年間の研究のまとめに取り組んでいるところです。

研究授業

3西
社会科

坂出・綾歌校長会

1月22日

「工夫がいっぱい！ 努力もいっぱい！ 野菜づくりにはげむ人々」

小西 寛

農家の人の努力と愛情を受けて育ったキャベツは、自地域は勿論、他地域に向けても出荷されます。しかし、そんなキャベツが今年の秋、収穫されないままに畑で大量に処分されてしまいました。好天に恵まれ、全国的に大豊作だったのにもかかわらず…。こうした事実子どもたちは、ズレを感じ、疑問をもちました。「なぜ、農家の人はキャベツを売らずに処分してしまうのだろうか？」と。

この課題を解決する手だてとして、各班を地域に見立てたシミュレーションを用いました。ある班を大量にキャベツが取れた「A地域」と仮定し、どこに出荷するかを考えるのです。当然、いつもの出荷先であるB地域に出荷しようと思いますが、全国的な好天を受け、去年はその地域でもキャベツがたくさん取れたため受け容れてもらえません。ならば他の地域に、と目を向けても全国どの地域もが豊作なのです。こうした学習を通して「廃棄するしか術がない」という農家の人々の決断を実感的に捉えるとともに、出荷は「他地域との関係を考えながら行われる」ということについて学ぶことができました。



1東
国語科

大学との共同研究

2月5日

「ようすをおもいうかべながらよもうー『はるのゆきだるま』ー」

金崎 知子

文学作品の読みでは、場面の様子や登場人物の気持ちを、叙述と結び付けて想像を膨らませながら読むことが大切です。そこで、文章を読んで頭の中にほんやりと浮かんだ様子を、叙述と結び付けてより具体的に捉えられるようにするために、一人一人が絵に表すという活動を行いました。そこに描き込まれた人物の表情や周りのものの様子、時間の経過といった様々な要素を基に、なぜそのように表現したのかを考えさせ、自分の絵の中にことばで書き込ませることで、自然に叙述に根拠を求めようとするのではないかと考えました。

また、友達が描いた絵と比べることにより、違いを見つけ、どのことばからその違いが生まれたのかを考えていきました。友達の頭の中に描かれている状況が視覚的に捉えられたことで、「〇〇さんは、きっとこのことばから～な様子を思いうかべたのだと思います。」「〇〇さんの絵から～の様子が浮かんできました。」と、友達が想像したことと叙述を結び付けながら、より豊かに想像を膨らませていくことができました。



「生きること」と「学ぶこと」の統合

— 学びの拡充を促すシャトル学習の開発 —



本校では、研究テーマのもと「学びの意味化」をキーワードとして、教科の学びで身に付けた知識・技能、合理的な思考、判断、芽生えた心情、態度、感性などが、自分自身にとってどれほど価値あるものかに気付かせる授業の在り方を模索しています。さらに、こうした考え方をベースとして、新たに文部科学省より研究開発指定(平成18~20年度)を受けた、個に応じた新しい学びのシステム「シャトル学習」の開発に着手しています。

シャトル学習とは、上級学年の授業を上級生とともに受けることで、上級学年の学習の様子や雰囲気を感じ、今後の学習改善に生かす学習です。ここでは自らの意志をもって先(上級学年)の教科の内容を学ぶことにより、現在(通常学年)の教科の学び方を見つめていくという意図を含みます。すなわち、先と現在を行きつ戻りつしながら自己の学びを開拓していく学習システムなのです。

シャトル学習の一番の特徴は、自分の興味・関心や適性に応じて上級生や下級生と一緒に各教科の授業を受けられることです。

例えば、上級学年の発展的な授業を受けることで、「これはほくの得意分野だから上級生にも負けないぞ」「なるほど、上級生の内容でもちょっとしたコツで理解できるぞ」というように、自分の個性を生かし、力を伸ばすことができます。また、上級生の授業を経験することによって、「〇年生になったら、こんな内容の学習をするんだ。だったら今やっている基礎的な内容をしっかりと学ばないと…」「さすが、〇年生だ。自分の考えをしっかりと深めていたなあ。ほくも見習わないと…」というように、先(上級学年)の学びの様子を感じ取り、備えの意識を養うことができます。

3年生にとっては、今まで学んだ知識や技能を発揮して、1年生にアドバイスしたり、教えることによって自分の学びの定着状況を確認したりすることができます。「やっぱり、わかりやすく教えるのは難しいなあ」「自分では、わかってるつもりでいたけど、〇〇が理解できてなかったんだ…」「もう一度、授業を受けられてよかった」といった具合に、自分の学びを強化・補充することもねらいの一つです。

自分が移動しない授業でも、異学年の生徒が常に自分たちの学級に入ってきて一緒に授業を受けるわけですから、そのことが刺激となって、「下級生には負けられないぞ」とか「あの頃の素直な気持ちを大切にしないと…」という気持ちが自然と芽生えてくるはずです。

義務教育最終学年の3年生には、特別履修コースとして近隣の普通科高等学校2校の授業を受ける「高校訪問」の機会を設定しました。それぞれの学校へは2度訪問し、各自が履修した教科授業を高校生とともに受けることによって高校の学習に対する認識を深めました。また、現在の学習の取り組み方を見直したり、学びの目的意識を高校入試以降の中・長期的な目標につなげたりし、自己の進路や生き方を真剣に考えさせる契機としました。

このシャトル学習によって、先(上級生の授業)と現在(通常学年の授業)を行き来したり、過去(下級生の授業)と現在とを行きつ戻りつしていくことで、**学びの視野が広がり、日常の授業が活性化**すると期待しています。今年スタートしたばかりですので、まだまだ、課題は多いものの、これからの学校教育の在り方を模索する上で、様々な可能性を含んだ取り組みだと考えています。



互いの存在に刺激されて…



緊張感の中、高校生とともに

幼稚園より.....

1月27日に附属幼稚園で恒例の生活発表会が行われました。
今回は、先生方が考えられたことなどを聞かせてもらいました。



劇について先生方が考えられたことを教えてください。

黄組：劇あそび「びっくりばこドン」は、園児たちが交替でびっくりばこに入り友達をびっくりさせるという内容でした。3歳児の子どもたちにとって、毎日の劇づくりの中で表現する楽しさを感じていくことが大切ではないかと考えています。上手に自分のセリフを言えることなどよりも、

今は自分が選んだ役が大好きになったり、クラスの友達と一緒に劇をすることを楽しく感じたりすることが大切です。

赤組：劇を通して、「みんなで力（心）を合わせるとこんなことができるよ、楽しいなあ」「ドキドキしたけれど、自分でセリフを言ったよ」「困っても友だちが助けてくれたよ」「友だちも頑張っていたよ」などといった思いを積み重ねてくれたらなあと思いました。子どもたちの大好きな絵本から2つのお話を選び、子どもたち自身がどちらの劇に出るか、何の役をするかを選んで決めました。赤組バージョンのストーリー展開。劇の最後に子どもたちが「友だちが増えるって嬉しいね」「寒さに負けないで、これからも元気に遊ぶよ」と声をそろえて言った言葉は、今の赤組の子どもの姿そのものかなと感じています。

青組：どの劇をしたいか、どちらの劇に出たいか、何の役をしたいか、全て子どもたちの意見や思いを大切にしながら、子どもたちと共に決めていきました。また、セリフや動き、ストーリーも、リズム室で劇をやりながら子どもたちと一緒に考えていきました。ふっとつぶやいた言葉や動きを大切にすることで、子どもらしい劇になっていったと思います。セリフも自分が考えたものと言うことで、その子らしさが出たり、覚えやすかったようです。しかし、これは年長だからできることで、友達とのセリフの意味を意識し自分のセリフへとつなぐことができるのだと思います。大切なことは、完璧な演技をさせるのではなく、友達と一緒に協力し合って何かを作り上げる楽しさを味わわせたいと願っています。

歌について先生方が考えられたことを教えてください。

黄組：歌ったり、楽器にふれたり、友達と一緒に演奏したりする楽しさを感じることが大切だと考え、無理のない曲や親しめる曲を選び、子どもたちと曲の出合いが素敵なものとなるように心がけました。時に曲にメッセージを込めて聴いていただくこともあります。やはり曲との出合いが素敵であることが願いです。うまくできることよりも、「歌が好き！」「歌っている自分が好き！」「楽器っておもしろい！」と実感できるような子どもたちの心の成長を重んじています。

赤組：2学期末に初めて触れた鍵盤ハーモニカ。とにかく嬉しそうな子どもたちを見て、全員に鍵盤ハーモニカと自分で選んだ打楽器の両方に挑戦させたいと思いました。曲は「カレーライス」を選びました。これなら、ドレミファソの五音だけで弾けるし、1学期のカレーライスパーティーの頃にずいぶん楽しんだお気に入りの曲だったからです。また、歌が大好きですぐに覚える赤組の子どもたち。「だいだいだいぼうけんのうた」は、元気いっぱいの赤組のカラーが出せるぴったりの曲だと思い、選びました。「初めての楽器に挑戦したよ、嬉しいな」「みんなで音や声を合わせるのって楽しいな、心地いいな」という思いが心の中に膨らんでくれるといいな、と願っていました。

青組：歌は、日常の子どもたちの姿の中で教師が感じることをテーマとしたものを選びました。一輪車、こままわし、縄跳び等、いろいろ遊びにチャレンジする時「はじめからできんと思っていたらできんの。できるって思うとできるよ」という素敵な声を耳にし、そんなことを考えつつ遊べる子どもたちを見て、成長したなあ嬉しく感じていました。鍵盤ハーモニカの曲はあまり無理なく、でも簡単すぎず、日ごろ耳に慣れている曲を選びました。（カントリーロードは帰りの片付けの音楽です。）少し難しいことに挑戦し、できるようになる自分を「私ってすごい」と嬉しく感じるからこそ、今の時期大切なのだと思います。

今回の青組は「しのろうどく」「らくご」など変わった演目がありましたがいかがですか。

5歳児になると、言葉への興味がとっっても湧いてきます。そこで、言葉のおもしろさを味わえる言葉遊びをすることにしています。今年は亥年なので、「まっすぐについて～いのしし ぶんた～」の詩と、「じゅげむ、言えるんで」という数名の子どもたちの姿があったので「じゅげむ」を選びました。

全体を通じて生活発表会の意図があれば教えてください。

本園の生活発表会は、形式をきちんと整えて表現するというものではなく、子どもたちが生活の中で親しんできたことを生かしそれを発表するというものです。幼いなりに自分たちで考えた表現をすること、友達や先生と一緒に表現する喜びを味わってあげればよいという考えのもと発表会を行っています。また、保護者の方々には、「じょうずにできた」とかの出来栄で表現を見るというより、子どもの普段の姿やこの一年間の子どもたちの成長している姿を見ていただきたいと思っています。

高井園長先生から一言

歌や合奏、それに劇ありと様々なプログラムだったけれども、子どもたちは全員自分の役割をきちんと果たしていたように思います。ステージに上がった時はもちろんですが、ステージに上がる前の準備の時も普段の練習の成果が出ていたように思います。

小学校より.....

土曜クラブの恒例行事となりました光輝里フェスティバルに向けての作品作りを、各校園の子どもたちが集まり11月23日に小学校で行いました。今回で4回目の催しとなり、経験者も多いせいか参加者も保護者を含め約80名が手際よく楽しく作品作りをしました。



作品ができた後、附属養護学校卒業生が勤めているお店のパンをおみやげに持って帰りました。当日できた作品は、幼稚園青組全員と養護学校中等部20名、小学校各学級、そして中学校美術部の作品を合わせて、坂出駅前ハナミズキ広場に飾られました。



今回は前年より作品が20枚ほど多い約140枚を数え、その為作品掲載用の木箱に新しく穴を作りました。おかげ様で去年よりパワーアップした輝きが坂出の夜空をあたたかく灯しました。

中学校より.....

2月3日、附属坂出学園教育セミナーが開催されました。今回のセミナーには、警察庁少年有害環境対策検討委員会委員 磯野 爽先生をお迎えして、「ケータイやインターネットのトラブルから子供たちを守るために！」をテーマにお話を伺いました。

今、大変な勢いで携帯やネットが子どもたちにも広がっています。子どもたちは携帯やインターネットを遊びや自己表現の道具と考え、心の癒しや友達作りのツールとして気軽に利用している一方で、その危険性には全く気づいていません。ご講演の中で、実際にある多くの有害サイトや犯罪の具体例をお聞きし、改めてその危険性に背筋の寒くなる思いがしました。「従来になかったメディアを子どもたちに与えてしまった責任を親はもっと感じなければいけません」という言葉が心に重く響きました。

親和会

卒業生・在校生 保護者交流会



3月7日(水)に、恒例行事として創立以来長く引き継がれている、「卒業生・在校生保護者交流会」が開催されました。この会は、卒業生や卒業生の保護者の方をお招きして、在学中あるいは卒業後の様々な体験についてお話ししていただき、在校生の保護者が子育ての参考にさせていただくことを目的としています。今回は、半数以上の在校生保護者が

4名の卒業生保護者を囲んで、貴重な時間を共有することができました。はじめに卒業生親の会会長の大林様から、いろいろなご苦勞を経て親和会が発足したころのことについてお話いただいた後、4つのグループに分かれて、座談会形式で進められました。お越しいただいた卒業生保護者の方は、お子様の年代、障害も異なり、在校生の保護者にとっては卒業後のライフステージについて、貴重な体験談をうかがうことができました。





(七條校長先生による学年道徳)

学年道徳(3月1日)

3年生にとって最後の道徳の時間に、七條校長先生が学年道徳の授業をしてくださいました。進行性筋ジストロフィー症と診断されながら全力投球で生きた甲山政弘さんの詩やVTRをもとにしながら、生きることについて考えました。先生は、自らを溶かしながら働く「1本のろうそく」の火を灯しながら、自分らしく生きることが周囲をも明るく照らすことに繋がるということに気づかせていただきました。そして、自分らしく生きるとは、どんな困難があろうとも次へ繋げていくために今できることを精一杯をやることなのかも知れないと考えさせてくれました。

送別芸能祭(3月12日)

先日、本校の1年間の学習の集大成となる送別芸能祭が体育館で行われました。今年は1年生が「青い空 桜の木」、2年生が「ハピアの森」と題した劇でした。監督や役者、大道具、小道具、衣装、照明、音響まですべて自分たちによる手作りの演劇に、3年生や保護者の方々からたくさんの拍手をいただきました。3年生のお礼の合唱は「旅立ちの日に」と「大地讃頌」でした。在校生への感謝の気持ちと、本校での学びへの感謝が歌声にあふれ、素晴らしい思い出づくりになりました。



中 学 校

附小フェスタ2007(2月8日(木))



1年間の総合的な学習の時間や生活科の学習の成果を発表する場として「附小フェスタ2007」が行われました。

開幕は、474人が心一つにして、美しいハーモニーを奏でた全校合唱でした。

合唱に引き続き、各学年ごとに、学習の成果を劇にしたり、ポスターセッションで保護者の方と交流したりと、工夫して発表しました。

6年生を送る会(2月22日(木))

お世話になった6年生を、1～5年生が給食に招待する「お別れ給食」の後、体育館で「お別れ会」を開催しました。

全校生でクイズやゲームをしたり、手作りプレゼントの交換をしたりと、6年生との楽しい思い出をまた一つ増やすことができました。6年生は、最後に劇の発表をしてくれました。



小 学 校

リニューアルしました!!

養 護 学 校

夏休みから始まった耐震工事(第一期)が一段落し、校舎の外観も美しく生まれ変わりました。今回は、耐震だけでなく「ハートビル工法」にのっとった「だれにもやさしい」建物作りということで、玄関にはスロープと自動ドア、エレベーターの設置、トイレも車いす対応になる等、使いやすい校舎になりました。工事期間中は、窮屈な思いをした子どもたちも、完成した新しい校舎にうきうきしています。現在は第二期工事に入っており、3月末には、小学部棟や体育館も生まれ変わる予定です。



第17回香川県養護学校駅伝大会

2月15日(木)、オーリースタジアム公園で、県内5校の養護学校から男子22チーム、女子7チーム、選手総勢150名余りの選手が参加して、第17回香川県養護学校駅伝大会が開催されました。本校からも中学部、高等部の生徒で編成した男子2チーム、女子1チームが参加し、力走しました。今年は耐震工事のため運動場が使用できず、練習場所の確保に苦労し、入賞には至りませんでした。それでも自己ベストタイムを更新した選手が多く、地道な努力が実を結びました。

幼 稚 園

おでんパーティー(1月29日)



1月生まれの誕生会を兼ねて、おでんパーティーを行いました。青組さんが中心になってつくったおでんですが、おうちの方にも手伝っていただきました。ソーセージやかまぼこ、肉、こんにゃくなどと一緒に、青組さんが育てた大根も一緒にお鍋でぐつぐつ煮ました。何度もおかわりにくる子どももいて、大変好評でした。

豆まき(2月1日)

少し節分の日には早いけれど、みんなで豆まきをしました。黄組はいろいろな色を塗ったお面、赤組は毛糸や色紙をはったお面、青組はタフローブを髪のように切ったお面をかぶって園庭に集合。それぞれの鬼と投げ合いをしながら豆まきを楽しみました。季節も暦上では、春。これから、ぐーんと暖かくなっていくことを願いながら…。



編集後記

栗林公園の紅梅・白梅を親に行ったはずなのに、桜の開花と対面してしまいました。人間たちがとまどう以上に自然界の生物たちのあわて出す姿に、数多く出会った暖冬でした。本年度は、四附属学校園、特別支援教室「すばる」のすべてが、教育研究発表会を行い、大きな成果と新しい課題をいただき、次回の研究に向かって歩み出しています。これもひとえに保護者をはじめ関係者の方々のご支援の賜と深く感謝しております。来年度は大学との連携・共同研究をさらに深め、積極的に推進していくことへの期待の声を、春告鳥たちの歌声に託して届けていきたいと思っております。どうか今後も変わらぬご協力をよろしくお願いいたします。

発行年月日：2007年3月20日

発行事務局：附属坂出小学校内

編集担当者

- 塩田 知子 (附属幼稚園)
- 横山 新二 真鍋 佳樹 (附属坂出小学校)
- 環 修 十川 裕史 (附属坂出中学校)
- 岩本 豊 榎尾由美子 (附属養護学校)